
雨の日にお好み焼き

浅葉りな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨の日にお好み焼き

【Nコード】

N2827C

【作者名】

浅葉りな

【あらすじ】

「夕立」をテーマにした短い作品です。

買いものに行こうと思ってサンダルを履いたちようどそのときに、夕立が降りはじめた。

今日、私が着ているのは、アイツが嫌いだった白い半そでワンピース。これで外に出て行く気にはなれなくて、今日はありあわせのもので夕飯を作ろうと決めた。

サンダルを脱いで、冷蔵庫の前までぺたぺたはだしで歩いていく。そういえばなにもなかったような、と思いながらドアを開けると、やっぱり中にはなにもなかった。

かろうじて入っていたのは、悪くなりかけたキャベツが4分の1、ひからびかけた豚肉の薄切り、それから山芋のきれっぱし。それだけ。

お米だつて切らしてるし、今、うちにはパスタもない。それなのに野菜炒めなんか作っても、多分、おなかは膨れない。

なにができるだろう、と首をひねっていたら、そういえば小麦粉ならあつたんだわ、と思いつく。ちよつとしか残っていないけど、あれだけあれば、お好み焼きくらいならじゅうぶん作れるはず。

そういうわけで、今日の夕飯はお好み焼きに決まった。

白いワンピースを汚さないように、アイツがいつもオバサンくさいつて言っていたやつが割烹着を着る。なんとなく、料理をするときは、これを着ないと落ちつかない。

その辺に転がしておいたボウルと計量カップを拾ってきて、材料を全部とろつと並べて、これで準備は完了だ。

2枚も作ればたりるだろう。小麦粉をカップ1杯、それに水をカップ半分混ぜる。山芋をざかざかすりおろして入れて、へらを探すのは面倒だから、手でこねる。かゆくなるのはイヤだから、ビニール袋を手にはめる。まるで、小学生の頃にやった、粘土工作の授業みたいな気分だ。

そうして、タネができあがった。

けれどもできあがったタネは、どう見ても二枚分ではない。でもやってしまったものはしょうがないし、テフロン加工のフライパンにタネを流し込んで焼いてみた。

一枚、二枚、三枚……。

お好み焼きはあつというまに焼きあがっていく。二枚分の分量なんて嘘っぱち、本に書いたの、いったい誰よ？

結局、四枚と半分（やや小さいのが最後に一枚できたから）も焼きあがってしまった。

「……こんなにひとりで食べられるわけじゃないじゃない」

とりあえずテーブルには持ってきたものの、私は途方に暮れてしまふ。

これはアイツを呼び出して半分食べさせるしかないわ、と受話器を上げて、そんなことできるわけないんだ、と戻した。

せっかく作ったんだから食べないのももったいないし、こういうのはあつたかいいのが一番おいしい。仕方なく、ソースを塗ってアオノリとカツブシをかけて、フォークで刺して口に運ぶ。

きつと、外じゃできないだろう。こんなこと。口のまわりソースでべたべたにして、お好み焼きにかぶりつくなんて。

でも私はもともとこういう女で、だから、お上品なフリを続けるのはもうムリだった。

まだ飾ったままになっていた写真では、圭介と私がシアワセそうに笑っている。私は、精いっぱいお上品なふりをして、ケツと言いたくなるくらいのおすまし顔で写っていた。

「圭介、あなたには、お上品な、おちょぼ口の女がお似合いだわ」
私は一枚目のお好み焼きを飲み下す。

そうして写真に、ソースたつぷりのフォークでバツテンを書く。ソースには緑色のアオノリやベージユのカツプシが混じっていて、なんだかむしろ笑えてしまった。

皿に盛ったお好み焼き、二枚めにソースを塗りながら、私は笑った。涙がぼろぼろこぼれてきたのに、それでも私はけたけた笑っていた。

まだ、好きで好きで仕方がない。

こうやって、ワザとアイツが嫌いだった服を着てみたり、写真にバツテンをつけてみたり、そういうことをするくらいには好きなのだ。

だけど私は、可愛い女にはなれなかった。

圭介が好きなのは可愛い女。ちよつと頭がたりなくて、舌ったらずな口調でしゃべって、高価だけどなんだかよくわからない料理をありがたがるような女だった。私はそうなるうとしたけどダメだった。

別れよう、そう言われたのはまだ昨日のこと。あのときも、たしか雨が降っていた。いまましい夕立。私はしばらく、きつと、夕立が憎くて仕方がないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2827c/>

雨の日にお好み焼き

2010年10月10日06時56分発行